十輻

帝國圖書館藏

辰
30
44

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

三十輻之卷

辰
特別
44
3

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

三十輻

帝國圖書館藏

老子曰

三十輻共一轂

當其無有車之用

埏埴以爲器

當其無有器之用

鑿戸牖以爲室

當其無有室之用

故有之以爲利

無之以爲用

右二品

昭和九年三月購求
帝國圖書館

戒三神原吉兩

同

南葵文庫

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

梅花談苑

霞洲 梅原玄輔 著

伊吹山のさせも草と毛江の伊吹山とは
袖中抄に落拾遺のせうう實方の
のすゑもまつとしふ哥を引きて此伊吹
の山を詠じたり下野國の伊吹山は野
古根山にて詠歌抄に伊吹山は下野國の名
所と云り綺語抄に伊吹山は下野
此山よさせも草おほくおひたりと云
云へど信の哥のすゑも草とのみ有
まひ下野へいひやるべき山のさせも草なれ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

娘と記せり列朝詩集に獻寧王の宮詞百首あり
其中の詩に君王翌日宴長春霖雨迷漫濟太塵
特令滿宮来厥止一時懸挂帰晴人とあり
上大人丘乙己化三千七十士尓小生八九子佳作仁ヲ
可知礼也俗間に諺あり節用集に
唐國のいろはなりと記せり本草綱目に猩猩は
形貌小兒の如くして黒色能く人の言を解して善く文字をあつめて小兒のために
書を疑して善く畫のごとし文字をあつめて小兒のために
まねするなりと宋景濂のつくりしものがたりあり

叙梁於是拜兵部尚書の名あり乙己とは一年なり三千
七十士は弟子の數八九子は七十二賢なり聖人一年を
もて三千七十の弟子を教化しまふなり中七十二人
ものよく備わるよく仁をたこるひ能ち私を達する
まねしてもろ〳〵ともろ〳〵ともの馬なりあるの者の木馬は騎るに慣ざる者
騎馬未習其事俞靈韵為作木馬人在其中行動
進退随意所適其後遂為善騎と東昏記のごとし
又衆人を指揮するは用ゆるとは木疆といふ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

えの膏菜を唐の音よみして唐葉とよむ勿論
中京家実録ふ陽の字よみして陽葉とよむ
とあり

时の鼓うつこと延喜或ふくろ時の貝をも吹きならすもまた午の貝ともちうまのりと赤染衛門の家集ふ
四条東北の陽を鬼門といふ左帝の宇経を生ずる
はうせともこれをもつて鬼門関のるまて波引きて鬼門
の文字を證せりふあやまりあるへき事なるへし

北國のふゆまのふそうといふものうて雪ふ
ゆく事もよみうて唐國まてその遺風ふ
ふ信西絵詞ふ冬月作小座床氷上曳之謂之
漫床といふ

今の女房の領をおそく汁を魚を加うすゆ
鰹をゆきといふよみうてひきもの
因禮紀洞ふ一切の食物ふ
あまり一向あぢわひなきふ淡味をいふ

よろしく所謂入寇空手回者也とよめる
あり外に未探あるとき申又三代実録貞觀四年
十月七日の記に正三位中納言大伴善雄の室を
寺とするなどもとづる參據とのせてより甚中に悪寇山之
徒帰帑痛刀林之氷割と詞ありこれもまた
空事とのみを用ひがたく理ありとおぼしき
掃部頭兼京貞敏の唐國にて
名三代実録に劉二商と
とあり

伏見院正應二年小條貞時將軍惟康親王鎌倉
より返し奉るに京より又其時執代の奏にて幕府
よりさらに御ゆるし奉りこれらふかきひそみ
とのことわりあり此事後のせうに今の文のこゝ
ろ通く時のうつり変ることかくの
如の世務の儀樂成ることに我不祥とてきこへ
これ嘉吉元年二月四日に赤松滿祐の宿邸に将
軍義教を亡し奉りし酒宴の席にて
義教を殺し奉りし時の儀樂の事にてあり
かくて今も勢ひの
備前楊貴美作二箇國は
わたりたるとも此姓異
家あり其の事の詳ならざる
いまさらへの戯なり目あり畏よ
よしや玄宗楊妃と遠義したまひしと婦嬰記
のごとく山谷遠義の詩あり遠義する者の通稚な
らんしく何ぞ麻衣神相よりの遠義する圖あり
このらの圖あり畏とかや五言雜ふるとも遠義

のまゝを画ける

醫用といふよといふのたゝせの宮傳よりひ出てゝよ
ちまに名あるぬるもゝせの近思錄を講もゝとゝ
しよこれも醫用といふ宋傳よりれこゝゝゝゝ
ま語あり醫用の説ゝ易の筮え亨利貞といふ
ゝとまゝ天行健とゐるゝの踈ゝゝゝゝ筮てゝゝ
へいまのをゝせともゝぬるゝゝゝゝゝゝ
をのれゝよゝろのまゝ推しゝゝ
わゐのま

醫書ゝ黄占白占あり端のゝ萬氏ゑ秒ゝゝ
ゝり

いろ人の門ゝ蘚蕨ての文字ゝゝて推そこれゝ
避疫の符あり也ゝ疫神ゝ共符ゝてゝおゝゝ
て逃ゐゝゝゝ夷堅志ゝゝゝゝゝ
わくのくゝゝいゝゝ陸奥出羽のゑいまれゝ檜垣
女家集ゝ拿あゝ声裏へてゝゝゝゝ
しくわゐへてあやまりきゝゝゝゝゝ
ゝ悪しゝとてゑゝくあゝ人紙ゝゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

わくのくものうえるわくよりも大陽蒸発のおおき
ものとありまたわくのくものとうえるのそもも
わくのくものとうえるや
精舎に儒者の諸生をあつめしこと
傳は咸住東海立精舎授講まる檀敷傳は立精舎
教授又姜肱傳は盗就精廬求見 注は精廬は即
とあるいま仏寺のことを精舎ともおるべきかあやまり
論語の池の凍めるときはきうぎの海れるくもるる馬
車をやれとも やふることなし 唐國はよく似する

あり水経河水注は盟津河津恒濁方江為狭北
淮濟為廣寒則氷厚數丈氷始合車馬不敢過
要須孤行云此物善聽氷下無水乃過人見孤行
方渡とも
外法ということもむかしよりの来れる故なり
りらの大きなるものなれば外法ともいうべきにや
ともとも
疱瘡神というは唐國よりも伝りし事なり留まる集は疱瘡神
社会建ともる社縁の縁もこのせもり

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

三年辛亥五月五日百官貴賤悉曽祇紙をもて
端午の曽をつくり書つくるなり
其紙のうへに人形をつくりすべてて
五月のもてはやすものをいろ〳〵書つくるなり
曽いこの遺制あるなり
六月十六日の祓禊の神事といふは四季ともに
行はるゝ後嵯峨院いまだ土御門の里よりかへり
給はざりしとき
ある人小弓を射て的をあつるものに賭をなし
て負たる者いそぎて餅酒

鯛ふるまひ給へり堂上にてもかくの
ごとくの事ありしかど例なきことなり
うるおぼえにかきしるしけり
うら椎も高ひなり高おとかく
陰陽師も両段高ひのそんとよみ
ありとかきたるとおぼえし梅菓子
ごとの事ありしかど例なきことなり
俗ふの為なりやまく〳〵
後深草院位をさらせ給ひて

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

のちもそのまゝ淳堂の井の上ま
まてつゝみてこの后をそこてやすまし
徳皇后の記なりまた元の代も秀水の民張登雲
といふ者の妻地よりうるはしき蘇石筆記なのせう
土のまの下よりあまたいしりのありてそれうつしもとる
ありおのふることいふことようくうへの物うつしもとる
岡舎うち未考のまゝとの勢てこの隔溝捉いわうまある
鰲の背よりあまたこの鰲つまよりて雛甲戎
うつしもとよりこの甘なおふさるわとなり

かうちをつくりてつまようにさうて痒うまみのやうに
そうやうにてこのまのことのかうしもうやうなる
いひ出うなるへし

鎮るを南方と名つくるこゝ不毛
よりいふとむこの関東へうつる勅使のかのゝぬき
ゝよりてきるをいつるとき浸う君臣ゆれ
元の詩人陳孚安南へ使して其國のことを詩につくり
多中よ鳳飯如瓶滴頭飛似轆轤よ句あり
これ安南の人鳳うを酒とのこまる時に臥ぬを飛
く

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

外へいつるとも敵徒おもいつる
おれらの事ともいひ出くるゝや
其をうちてこゝ傍更あるまじ
ものよろこばおもふもあるまじ
宋太宗嘗冬月命撤歌炭左右或啓曰今日苦寒上
曰天下民困是寒者衆矣朕何獨温愉哉王銓の國
老詮死のもらけるを延喜帝のこと歌よ御衣をぬ
給ひなよく例をも
照寧中 西賊圍羅近城甚急賊得吾禁卒語之曰汝
語城中張大吾軍使速降當与汝爵祿卒敬諾之
致卒危梯上下瞰城中卒輒大呼曰西賊人少粮尽
朝夕去矣城中堅守之賊怒臨之雖古忠烈之士無
以過也けるや宋の王詮卒ら閔見延録その事を長條
まて鳥井強右衛門ら甲州の勝頼を勧まじきよく似り
四國よ大神といひまじりのあり唐國よ大蟲よりおそ
くるのまじもとかりることなり海よ陶瓶といふ蛇蟲
よりともよ千實ら搜神記ることろ
ゐるあいみるはなれ人のの許くゆくあるしも設して

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

まちうけうたあるじのる井十兒もありて出ありて
俳諧連歌の句よ五侯鯖とやことのかいつあることにて
やんと問ふ件のはらせ鯖のるをとふまうけきと
つまうまうまうまうく目をつぶ漢の代よ五侯
とて五人の大名のかいるのそれらくひるはそれとも
中ら鯖の字紙俗よそとよまうまでていひるいと
おかしうう五侯鯖が西京雑記よ出ず雑ねと侍せ
言ふを鯖といふてそのち前ニマセ和のるまう
いろの世よ續三弦ありむうーかの琴ともも續て續

琴琶とも中ら長明う方丈記よ
信濃國犀川の犀のそら流れ泉小二郎よ降て
とうーもそうと東鑑よえうむりこのくち犀の
ありうるやまさいおとりのをはりて犀とふひ
うるもや
やくも当ねいはをりうきはまこあにやえうきつくるとある
女をきして出ましふ勿論あまた男をつまやふ例い
むきーのかふいるやきうつうまのはかしこれこの
はたいたとを指生のうとうも下照姫の活玉よ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

和名抄ニ唐韻云鬠者和名美豆良ト云訓上同屈髮也ト云桐壺
巻ニもとゆひなどあまいまひねくれたるほどよりはじめて
瘡瘡の書ニ生人ハ俗語なるへし日比ハ新しき生人ニて
ハ云々ハ俗語なるへし日比ハ新しき生熟ニ對也俗以物之未
成熟人之未識熟皆謂之生ト又宋の五光庭カ兼明
書ニ柳文暢江南曲汀洲采白蘋日落江南春洞庭
有帰客瀟湘逢故人近代詩人皆以為二人相見生
人忽於瀟湘之上相逢過也王褒登ル容越志杭人堂
構簡畧上漏下湿水鳴床間客子至門索飯始入又
無佳客晤言日對生人作未同語殊無味明の陸灼カ
艾子後語艾子畜羊両頭於圃羊壮者好鬪毎過
生人則逐而觸之門人輩往来甚以為患ト云ル
いつれもたゝ一ゑてよろこばぬ人をいふ
歯をはくるニ楊枝を用るニ修稽律ニそゝ楊枝

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

の五利とも義うを一まへ口吾うこ口臭う
こへ風を除き四へ熱を除き五へ疲を除くとある
霞のごとくといふ〳〵ようくとよめとも可や
俗ふ以上日やけのことなり朝やけ夕やけと
暮あるとは田家五行ふ胡ある不出市幕春走
十里と可ま〻朝雲暮雨ふ等水蒸ふ気とも可
可一飛ふとは推古天皇ふ二十一年ふ冬十月ふ
を申てあつたいまつまびらかならねとも
以飛をしめるうと後世ふ妙れうまれと允恭
紀ふ木梨軽皇子ふ可ひきふ山田をつく山つくと
よめうへ推古天皇以前ふ
こゝろのうちを申ふひなり
漢武の李夫人のうちを画くまで
唐玄宗もこれふまれまで
揚妃の死つる後そのうちを別屋の壁ふうつして
朝夕ふうむうひてなをきこと唐書楊妃の
伝ふあるごとし
武帝の李夫人のかうちをまぼさて非郭とのつまひ

これ似ることあるを宋殷淑妃薨文帝常思見之有
巫者説帝云淑妃可致帝大喜令召之有少頃果於
帷中見形帝欲與之言黙然不對將執手奄然便歇
帝在哽恨乃南史殷淑妃のことにて王舟といふ
もの揚州刺史にて王舟といふ道士を妃のもとへ
とゞめて玄宗と物語りせしほどに玄宗ふと
仙志よろこぶるの
和名抄に無妻曰鰥 和名夜毛
無女かくれとこをとんあるやもめといひて
男やもめをみてとかきたるなり業のまちよやりそんすこと
てすくにつとあるみなれとことをやもめといふいま
俗のたとことをとんあるよかするものてやもめといふも
乃いひあやまれるなり
菅丞相乃文をまちこにまちあつめてこれをこゝにて二
十一日かの御法こもりの四季おこなはるゝ
春秋のこもりを彼岸といふのようにいひ出て
なるなや 行幸のまねよ十二ゐるまてと有り

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

暗吟日記ま彼岸よりふるく
え弘のけい世よ韓文をもてやし
無礼講のときも玄恵法印は昌黎集を誨セ㐂
そうまこ佐渡判官の通道譽らるをたちときも
おのまこ家共書院よ義之ら草書の倡昌黎が文集
をかきをわまきをとくそうを
むくいものもらぬ客よりなよりは
土佐日記よこのえのうのもろ
ひらきらと行も四季のあ語とないとーのもきこも能

ああらきのあとこ立てもそうよりてめさまもまるても
あることあれとそそらいとーよ体ともくさこも
薑のようの中ようともうのさまよそて何るものをあうう
よ活様よ雅俗うかつむ行のあつ共ひとよも君を
我やそうう

蘆筒

世よ白兒とふものあう唐ゆそて社公とよりろし
の俗よ神よ脇をうまを与れ肌毛髪ふれ
白ーとふさみをかくい色つけ当う女をい社波め
とふとう世る中俗醫祝よ行う又白児の脳中よ社公

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

珠とてめでらるゝ珠のひかりことなるべきにもあらず

折乾とふこのくらゐの俗よりは格代着代のものなり數書纂要ゐ以銀准折礼物謂之折乾とある明の呉遵ゟ驛吏の詩ゟ盤中滋味皆膏臘（脱字アルカ）自揚鞭問折乾と俚言ゟ見ゆ

ちいさき書冊を巾箱本といふ俗よりは寸珍なのよし

これも南齊の衡陽王ゟつゝ細書をもて五種或ハ一巾箱ゟ等ゟおゝきさよりいひ出ゟ歟埴

ゟ鼠璞ゟ引事

うつゝとりゟ等ゟ茹のことわりゟ今證よりゟ陸奥ゟ

五月そゝのふくことしもわりしゟ空ゟ方の中ゟ

かゝりゟてくゟゟ引ゟゟ

あきたゟといふくれゟ國例ゟさること侍ること

くゟゟおひ行ゟゟありゟとゟ

串ゟてゟゟん淺香のぬゟ

くれをゟゟとりひくれゟゟとて茹といふゟと

あんゟゟけゟとそゟゟ俊ゟ侍ゟゟうゟことゟゟもと

五雑俎ニ浙中郡齋有小蚓似蜻蜓蟲而小如針尾好緣
紙窓間能以足敲紙作聲若有人叩門而聽之如滴水然跡之輒
躍此焦寃之類與ニ博物志ニ人家有小虫至微而響甚尋之卒不可
見號竊赀大如半胡麻形似鼠婦有両角白色振
其頭則有声孟康朝作賦比之鬼魅ニあるこれい
むしの名を知らず
いつ画工のかける霊照女ハ宋の時麗后士名い温字ゐい
這えとゆい一人の女あり丹画ニと

問答セーとまれ図あるまくり
えるのとー高時亡ひてのち大
それより以来四重の方四町
のせういまの四重も四町餘
の詩も元冠礼楽三千載日月光
つまへなと

宝衛鎌倉よりて将軍介宮
回禄を深しるを新造
とまれ斉院次官親義回
文字よはほをゑくくみよ
る人を野外送葬
往還
聞変と常なとい事
わたしまりるとめうもち
れを掃ると名つくてまつ
とてかるなといひつへう
深夜容姿艶麗跡

花盖無譬也と云ふ

女房男房といふこと尊き意訳なり

なれど平安朝より女房男房と云ふ

こと有り紙燭を出せと云ふ類

まゐ侍中奉公の人も女房と呼び

實録中命ありて宗廟の大佛と

つくる唐書も例すること云ふ

なり唯一國中錢を以てし

て錢を積むとしの人なり臣下

世宗吉野佛説身世為妄以利人為急使其眞身

尚在猶欲割截況此銅像豈甚可惜哉とてら〳〵

うちこぼちて錢を作るなり古代史のせう

左傳絳縣の老人臣生正月甲子朔四百有四十五甲子

矣其季於今三之一也と以前より季とい

今より為り生れし年の正月甲子の日より四百四十四全

甲子に當て其子孫の一甲子ゐい六十年を滿して今日

癸未まてよ三分の一まて二十年を好ことありまこと

二首六身い注よ云字ゐ二畫在上得三六為身智算之

六とあり二萬六千六旬まて老人のまれ一日より今ま
まての日ゝまでや四百四十四全甲子より二萬六千六百四十日
あり其季三之一二十日を加へて共よ三萬六千六百六十日
これ七十三年の日かずなり此老人文公の十一年己巳
正月甲子の日よりて襄公の二十年戊午まてゝ
七十三年なること此以下もいまゝ此の者のことはよはしるるもの
はるゝとゝいふ古今集よあるもかゝるまゝあるべし
行のよのもしたゝ我ゝあるへらあり

花宴のまきにうもおもとけ
大鮮よやいま俗よわとけ
きことをいへこのおろ
はゝのおといふトをるとき
香久山のはゝの朱をもちゐ
公家よ俗ゝいまに思兼神の香久山の麻の
かゝをぬきて焼トーせまひしもはゝの朱を用いる
ひゞろとゝ江戸都の家よ香久山のはゝのふ
ゆゝまてしかゝぬくゝもゝゝ

はゝのまいまのたゝくといふ事
ゑんとうふみまてこゝろもうらゝかに
ふとゝ野呂元丈まれ一和名おほあふ栗櫻の實もを
用あり
甲陽軍鑑といふ書にも坂彌五郎
駄雜ぶりて信用しがたき記事多けれども
のものまゝり出てるまや 賊首信玄をはじめ
あらはとけとゝるまてうのち秀吉興りて信玄兵
と異なることなくなりぬまて小刀細工のまて

呵りあひとか等履とうよゝとまへゝれといのゝるよ
川角太閤記ゝゝうう秀吉
あはまてゝおまうゝ呵りくゝれ
後撰の歌ゆゆやゝいゝもゝゝとゝ
こゝおまゝせてゆくゝゆゆ
多九論義の西國ゝ呵
のゝゝくゝれきてまゝるて
るゝ撰うゝあゝ
堀川百首ゝ俊ゝとうあけ田楼歟のまるれこゝゝ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

つ〻一の岡のあせこなをおさく顕昭はうこと解して
馬酔木とうきて汚せこととよめるを馬の毒もてかれ
とつるみとよめるありしてかのせんそうこととやす
臨兵闘者皆陣列前行といふ九字のいふ道家の出よりて
よ唱る呪なり抱朴子曰凡男女
破瓜年とは十六歳のことをいひて
謂る世以破瓜之八字
碧玉破瓜時呂洞賓文通士よ嘆し詩よ功成當在

曹植櫻桃賦
陰腐談
十三山莞
ムラ美う
重杯宝鑑
なりく
臨兵闘
斜皆陳
列在前
のカ字
あり

破瓜年陸放翁う詩よ碧玉當年未破瓜学ぢ放
舞入侯家なと作れり仍て儒者の信云う像よ賢て
隔城摧陣破瓜年とよめる多く破瓜い十六歳のことと
のことろうてかるひことよ
哲那環といふハ袈裟よつる環のもう哲の字よ執
音よよへーと暖妹曲筆
むりとちたのほうりよたなまつるとしくう詞花よ
ままつるとーの終よれうたりくものやまもあ
ととすんとよもろう枝のみよ出うう葉のことうまて

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

[illegible]一條院の法時も有[illegible]
伊勢方傳うとあり蕎好[illegible]
[illegible]や八[illegible]
ころい世よれ[illegible]
[illegible]のもやえ[illegible]
山のれくにもおのつ[illegible]
西京雜記ニ被中爐衣毬といふ
安次あり漢のとき[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふりのあり
[illegible]
[illegible]
つくく其[illegible]
あり

廣韻肴の字の注ニ兎淅穀而食者曰肴とあれハ
海味のミよあらに菜蔬をも肴といふへし雞卵をも
肴といふ南史ニ孔靖飲高祖来[illegible]酒無腴[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

とてのくの仮城のうちゆきて酒のこりうち砕て
そこるさうなたひたん(てふ)といひくれいとんなるそなる
梨とさし出しうこれふさうるおうかれおこるる
さうるうとて口のあうさそれいとんなうち
うるひていとのこさうるとこうちうえうよれくれ
伊勢お酒ようさうれありくたちとうとてうき
まつもれうちれとうよめありされたちれとさうめ
といへい梨もあとてうさうるふうむといふれく
れとこれよくちうあうてまけえうりとんるえ
うちはさのく優あふねともとかかの茅よけうて歌
あとよくさくちきうちんろうりく
さのくよくくちんの軍うとうえ枚窮を世人す
よくされり北越を申記よ富田信濃守あの印原の
注まて軍うことの(ママ)ありより接れきうあり
信玄へうれ和義をお記を國をまれい紀州の宇佐美
行隆が仕うて其名をいかくうれの(ママ)宇佐美
駿河守未あうくれの件のちまれの申るまる
よせて騒のちをえんかやうくとうさて景勝い

大津呼の称号もまつりごと改宗あとゝ
人の様よろづ

名管記部數

狗行高ヶ強盗の強きのうそ
狗近豊家侍笛記 同改
瀧波
古筆葉賜歸空雲記
筆葉龍聽九記
霜夜子記
葡萄記
了名迦葉舞記

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

狗幻高ら強盗乃雅とのうら
永久の比狗幻高よりよたのう辞く人ものうう
地発芽を信して朝夕地発の宝号を唱へう笛を吹
けきい楽ひとつを吹ても南無地発芽とひとく唱日
大明神のう法楽しまうてうう
まく勇きこ程もなうううれそせむう
模笛ととうう力ま手ありせうく南無地発芽くとうい
う去福ま行まとうう笹浄盗号逃うへうぬ我舎は
助うまれとも舎ま吹へてとわまのはう笛をまあて

拠ぬとおもひて吹てうるまゝ拠ぬ
いよく地蔵の宝号を唱ふ春うら
ゐまて遊てうけるすゑてもの
やうくうれうゐ物思ひはかるゐ出うほく笠人とも
彩雲の家よりそゝりて北風を問けまゐ来へうち
待うけぬ地蔵菩薩の霊験まてうちほうちせひつる
当面へくもまくゐうしくお月えそく物とうん
いそき西へうつる程よ佐保川のそ
来ん西へもんとすれそ面うふ

又面つゐいよ南へゆもんとするもこはうりて面よ
いひけるいる程ひけるまんうしくれてゐうへ
もそ面うを後そとくうらも待るやうとゐまる
その彩うる笛をはその後弱林とうるつけうとや
つゝへ待う

狛近豊家傳笛記

笛之為名所以滌邪穢納之雅正也故其調一定絃
歌皆従創於黄帝作於漢武賦於宋玉馬融盛於漢
晋唐家之間其在春則留侯弄雒陽高処之花夏則

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

謫仙落鶴樓五月之梅秋則少陵吹於關山風月之
清冬則君虞横於天山雪路之難其声或高或和或
亮或朗可以攄憤可以暢神可以娯耳鳴
呼奇哉妙哉本朝之伶官名其家者不鮮就中尾張
連濱主米和年中入唐傳此藝之秘旣為一流之祖
其後師資相承至狛行高其枝弥精而專其門有一
名管称錫杖丸所以其名之家記備矣五世孫近眞聲
價藉甚其三男眞蔦以降世々綿々不隕其声以至
故越後守近直其子近豐襲任越後守号叙從四位
下毎歳赴南京調錫杖丸以勤春日之神事寛文年
中
今上皇帝御笛始之時殊應精選辱候
御師範尓來屢奉授秘曲乃知一藝之達不忝祖先
誠為一家之美談也今秋近豐東来告余以前件請
記其家傳所由来余嘉其傳承之不絶以為之證云
尓

延宝乙卯秋九月　弘文院学士忍岡林叟

錫杖名管者越後守狛近豐家傳之古物也其音

文集作乙卯孟秋

拔羣類而有感鬼神之妙矣頃日近豊請弘文院学
生林先生作之記而請余嘗嘉古楽之不衰
今感古物之永存因滌毫示之猶想有斯能而名之
明於不朽也

竹洞野節書

瀧波　輪王寺准后より筆葉を賜りて

それが名はたゝくよと結ばゝや道遥院前大尽の咏ま
ものつゝ耳まよあゝよ塵よ世いまみのみま瀧はまゝ渡
といつる事をゝまて瀧波と注きてくはゝゝせゝよ又うゝ
ゝゝゝもよゝてくゝゝよと結ばゝや瀧の飛ゝまを
萬丈巖崖折といつる瀑布まゝ
山のいまゝもくゝゝゝゝ雲まゝ

楓陰老敬叟

古簞策賜歸穿雲記　余近歲好弄簞策向
者稲宿祢近業在耒淹留屢招之受其術因欲得古
管而不可得客歲偶得一管古制可愛今歲余来京師
示之近業之父近純修補之近純熟視曰此甘州之

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

竹也幾可経四五百歳矣実希有之珍器也自古称
名管者多矣若玉篠菊枝等固非所擬若霜夜者可
以相比予自是日夕翫弄珍之尤甚頃侍　内宴与
御笛和　上覧而甚稱旦問其名余以無名對奏請
賜名於是冬十月六日辱渙　宸筆　勅賜名曰穹雲
蓋取杜牧衆音不能逐鳳ニ穹雲儛句也光榮特異
可謂絶世之奇宝因記其由云宝永丁亥之冬天台
座主公辨書於洛陽廬山蘭若

篳篥龍聽丸記　　國家之於樂同禮俗亦異漢土之風當好変革敗礼樂兵刑輿地官秩之制雖隨時改脩猶矯其弊而古法旧儀多不復傳国家之俗経久猶守故雖典章儀物能存其旧而固脩之久難於更張此其所以相傳失也夫樂之来也久矣自雲門咸池以来為韶為護為夏為武秦漢以降不知其幾変而至唐貞觀中損益前代始備華夷樂為十部伎昔吾国　先王之盛使舶往来傳其声容隷在樂府臣時奏御雖其詞不傳而其音響

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

節奏之微級兆舒疾之序歷數百年而莫之違若今所傳三臺破陣藐合褌脫是也而考漢土之条自宋已還代変新声不唯韶護咸英之不可得而聞而唐之部伎亦不復傳東叡准三宮一品大王素好雅樂今茲在都屡延搢紳召時名工奏其聲伎屬者通玄聖安皇女命伶官伯宿祢近純新制篳篥一管以贈之于王近純藏嘗所藏漢産銀竹以製之形雅音亮王甚秘愛　太上皇勅賜名龍聽尤取白居易詩猿声不喘魚龍聽句也尤者本邦呼物之称猶漢語曰

子曰兒也　王大悦子侍席之次蒙賜拜觀且命之記子恐懼辞謝而不得夫游魚感瑟六馬仰絃至和之音其妙動物　王之奏之也其致蛟龍之聽也固不虚其名因謂今　先王之遺法守而不失其所損益固有其本豈漢土之俗屡務紛更古制蕩廃之比矣哉予因視此器感古楽之能傳謹為之記云

霜夜子記

夫篳篥者樂管之一也伶官一流

宝永四年丁亥冬十一月十八日　伊藤長胤頓首拜呑

傳以為業立其門者既久矣従四位下甲斐守伯光逸老於此藝而其技彰聞毎有御遊常候　禁庭屡合奏　御笛可謂栄也今秋東来訪余於忍岡曰家有旧管名霜夜願作之記余素不悟音律然以其識画稍久故始就霜夜辞曰露結為霜月沍敲氷者非寒夜之景哉當此時一弄一発則宋玉之悲可以解歐陽之嘆可以助焉豊嶺之鐘可以交響焉禁戸之砧可以撃節焉若錯之絲則流水之奏可續其絶彭澤之絃可補其無乎与笙笛之奏則蠭谷之鳳暖律可回緱嶺之鶴飛鳴可知也不知謂何也嘗聞白香山聽箏篥歌曰急声圓轉促不斷栗々轔々似珠貫光逸常詠此句刻其函面且夫吟霜思月欲発声之句亦於名有所拠也彼薛氏小童所吹香山猶耳況老於此藝者哉遂応其索云延宝乙卯之秋九月弘文院学士忍岡林叟　姓晋軒林子晉

菊枝記　　余曩卓錫於芳野卧龍山数載春日之花夏夜之涼秋月冬雪殆手足快平生也意此勝境

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

而翫物亦不可無因就一隠士学得了二三曲然而
自覺其學未成其律未調心厭之中廃矣尓来遊武
陵入東奥其廃增甚矣今茲壬午之春応佛国之請
来寓洛陽有近純英士世朝廷余官而得鳳来獣舞
之妙飽聞声聞未曾見今既見喜出望外乃以旧時
所学訂之英士其傳授之精雖余魯也頗得日新
也一日携二三子遊南京而飯到木津渡買棹順流
而傔小倉時維孟夏四山翠嵐西岸青柳都堪供詩
料也於是師資酬唱互相朗吟ニ又叫ニ又吟餘興
未罷又出嚢中了奏両三曲徜徉扣舷而坐傍有一
翁斂衽謂云壯哉師之曲也若夫藴長公遊赤壁客
吹洞簫何又加焉我有一管名曰菊枝雖不能奏性
頗好古薫故常懐之方今遇師請寄之余曰翁其何
処人姓何名誰始無一面之識況又余曲未足感人
豈敢得受乎固辞翁不可不得已受既而舩亦到岸
相揖而別終不通其姓名矣飯洛而過英士語以前
事而掌云是古管也幾乎不
三百年来之物胡相肖邪余曰何謂曰吾家之青

名霜夜依俙彷彿只有大小之異而已遂閑瑶函示之
其製果如出于一手也且露結為霜是秋之候而菊
乃霜下之候也由是視之今此二管蓋雌雄也凡天
生神物雖相別後必相合蛇泉太阿古之神剣也悲
鳴求偶嗟呼此神管安使雌雄相別士其留之英士
唯二諾而起謝余相扶日既頽暮芸苑冀承請誨何必
為謝士曰吾我家元春日之神官也今師詣神途而
得焉想必春日之神託師辱賜焉者乎彼舟中之翁
亦是神乎是乃所以深感深謝也余曰善哉士之言
夫神為霊亘古亘今応縁赴感無物不託唯在其人
之信与不信而已士今信則彼翁亦神也菊枝之管
亦神也此神管永護士之家則桂子蘭孫各得精妙
流芳万古也矣英士聞而悦又請記焉遂命筆之英
士姓狛氏窪除朝散大夫正四位下甲州牧元禄壬
午季夏中澣日東甘露山主大随道人亀撰并書

了名迦葉舞記　　東叡一品大王好吹了所畜
亦多是嵐在洛屢召余談法之次命使名其一管余

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

請以迦葉舞名焉王問其說余曰在昔迦葉尊者聞
緊那羅作樂頓忘少欲起動舞戲　王之奏之也若
迦葉尊者亦能起舞乎　王笑而可或難於余曰緊
那羅之樂豈若勝妙五欲故能使迦葉起舞　王之
所奏雖工既是欲界色声何能令尊者舞無乃称之
過乎余曰不然也豈不聞乎昔貧女乞作一燈奉上
世尊其光赫亦竟夜独然雖目連之神通不能傾動
正使四大海水以灌之毘嵐以吹之亦不能滅者発
大心而施故也大心之德不可思議如此今　大王
既能発此心上期妙果下憫群生扶宗之願不愆平
素力輪之護使其常轉其德之彰於声也必能使十
方諸佛歓喜然則迦葉起舞豈為誣乎況　大王所
作豈唯自娯而已哉時亦供三宝何謂不可若夫出
家作楽不合律規則今所不論難者悦服遂昏為記
時宝永四年歳次丁亥十月老苾蒭光謙謹撰

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

天明乙巳孟夏中旬得勤思堂藏本写之 社友一
云名今假名名笈就繁簡云

秦君兼亮新造鳳棠記

秦君兼亮者家世善鳳栗而為伶官於東朝
有僧方國者摂人也好音識秦君於東都一日
見秦君曰予所親有高見氏者家于天王寺之
側其宅不知造於何世蓋二三百年未嘗罹災
云予前往其家仰見其屋椽之竹可以為管篇
因乞之得管材數枚以帰今受君善鳳策謹献
笳材一枚唯不知其中用否秦君得竹而喜遂
命工人斬以為鳳栗其音甚好実良管也他日

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

秦君過紫芝園而語純其事因出徽桌於其
懷以示純旦曰此物雖新亦足以為家珍而遺諸
子孫願欲乞子一言以為記純亦雅好音律閒秦
君之語而心窃豔之則応之曰敬諾雖然我見其
器而未聞其音不可以出言也請為我一奏我將
諦聽秦君乃奏二曲其音悲壯鄉音欲遏雲聽者
一以歔欷一以慷慨雖以秦君之技之善亦管
之善実佐之尓純雖無似豈能不為之扑哉昔
者漢蔡伯喈獲柯亭竹以為笛今秦君事酷類
是此誠不可不志也於是遂記其事以貽之
因庸作歌曰
竹兮椽兮不紀年兮斬之為管九孔穿兮
徽兮桌兮五音全兮於皇厥聲達天淵兮

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

筆業乃記

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

辰
44
3

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

三十輻之卷

辰
44
4

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

みなもとの宰之

以呂波傳

名匠歌

以呂波探玄抄

五之品

作者不知

細井知慥

作者不知

輯

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

いろはを世上多くは弘法大師の一作とも云ふ実に勤操と
空海と力を合て作りたるなり以呂波の長き
乃作より前に空海勤操と云る武将ありやまけ
みて四句あり一くさりづゝ乃句切ときゆうまで海ありて
ふさはてゞりとまりまでなり勤操の作奥よりて空海なり
作まで云布施なり勤操の作奥よりて空海なり
世の中のもくろみの空事集の
後句を用ゆ又幼稚乃手なるひらがなのはつよ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

きくやこの花をよりより今をたれ
後香山うけまへこそ尚山の井の
はまゐるとき男せうとそうそ疫もまろうの
雲常は長歌なれいとて初雪の
後香山は用ひうとこ云況那姫
ぬり

いろはにほへとちりぬると

是も歌よりの句や色は句へと歌ありやとこ事也
花のまりて色香歌うたりもあく歌と堅

のゆうさはかくのことくとたとへてそうる

わかよたれそつねならむ

二句めあり我世誰を常ならんとるふ云花のちまて
句もゆうてちるとく人間てとひさうくてそうふあとふ
歌なひあれい一世も誰を常ならんやと世るの事を
之り

うゐのわくやまけふこえて

三句めあり有為の奥山今日越て世上のうゐあり
わくら山に死まの山をさして死なう世をさて死の山を越て

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

あさきゆめみし　ひもせず

ゆめの世に　ゆめみしほどの　なかきよを

とをくて今ぞ　ねざめしてける

世のつねの　夢は昔を　戀ふるまに

ことわりもなき　ものおもひぞする

醉もせず　云爾

事も醉も　世をうしとてたしなまず

況ようや前の　多いひいでの中略

思ひ出づる　長歌　ここゆやこのかた

ようの後人のさくの二字は前よりは略して京の字のみ入るもの

京

此字は佛教を師附まして

きて京といふし且つ法の事經よ一時佛在王舍城と云文あり

此もまて引たり何のまて仏在も

一ならず事の所をおもて京よりおもひ別

寂光のみやこなどの字のみし前の如又まて世の善事

生死をすれて寂光淨土へいたるをいふ

寂光の教のみやこなどの字のみ入れ佛教の

勝とをも

瓔云一説よ京師の所をと二字を用し教よ京とのふとあり

四十八字ゟ四字迄を九条よいふなり

一二三一のまま
其ゝ數の文字幼稚の人其あやまり
ものゝ別ゝ添ゝなし

正字のこと

世上流布もの以呂波の正字あり誤り多し一ゝまていろはの
仮名は皆音を用て訓ゝなり〳〵と
以呂波仁保へ土　人漢音ハジン呉音ハニン叶音ヘンノ音ニ先ツ
韻ニ入也ヘシ音ヲ取用タリ一説ニ人ハノ（ヘツホリ）ノニツニテ作ル故ヘツノ
音ヲ取タリト云ハ不用　〇土俗ニ止ヲ用誤ナリ止ハシノ音ニテトゞマルト
訓ス音ヲ用レバトニ不叶土是トノ音ニテツチト訓ズ

知利奴留遠和加　和ヲ俗輪ヲ用非ナリリンノ音ニテロハ訓ナリ
與太礼曽圖祢奈　圖俗ニ作門津皆非ナリ
良武于爲乃於久　于一作宇
也末計不己依天　己俗ニ作古已可　〇依正字ナリ俗作江
江ハコウノ音ニテエトヨムハ訓ナリ依ノ字可ナリカナニ書トキ江ヒ心ニ出又チゝミ天トテ
元ノ字ヲ言ニ衣ノ字ノヤツシナリ衣元ノ如ク作ルヤツシタルモノナリ
安左幾油面美之　油ヲ由ニ作ル説アリ〇面正字ナリ俗
女ニ作非ナリ女ハジヨノ音ニテメトヨムハ訓ナリ
恵比毛世寸

勤操傳元亨釈書ニ有姓秦氏和州高市郡人慈道慈也釈書ニ有傳慈在唐逢密ト云者得テ虚空藏求聞持ノ法ヲ慈傳善議々々傳勤操々々傳空海云云此詰在道慈ノ傳ニ善議姓慧賀氏内劄錦織人奉道慈ニ受三論之學ヲ

右ハ呂波傳佐ノ末氏ヨリ書ヲ初ル也

伊呂半仁保人止　土
知利奴流遠和加

與多礼曽ノ子奈　門音豆門ヲツトシツヲツトス
良牟宇乃於久
也末氣不古江天
阿草ノ由女美之ノ幾ヲ支トスシハ之ナリ
ノ恵ヲ左トシ左トス
ノ比毛セ数

此片仮名吉備公の制作と云人乃作なるべし

右大橋氏傳言の傳記事有り

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

右ハ備大角氏ノ書ヲ以写シ来

君臣歌

きみまくらおやこいもせに（幾美未久良於也己以毛世仁）
えとむれぬ為ほりたうへて（衣土武礼奴為保利太宇倍天）
すゑしける安めつちさかゆ（寸恵之計留安女妙門知左加由）
よをわひうふねのろなは（与遠和比曽乃呂奈波）
きみまくらおやこいもせに（君臣親子夫婦兄弟群）
えとむれぬ（衣土武礼奴）

井鑿田種

為ほりたうへてすゑしける安めつち（為保利多宇倍天須恵之計留安女都知）
栄さかゆよをわひうふねのろなは（佐加由与遠和比宇布祢乃呂奈波）

いろはの歌ハ空海法師ノ作ナリト云ヘリ千載ニ伝ヘテ用ヒテ手習ノ一ノ初ニ置リ其四句ヲ本トシテ神道儒教仏教ノ事ヲ知ラシム等野耕雲ノいろは歌ハ仮名ノ数ヲ合セ歌トシテいろはのたらぬ処ハ補ヒ添ヘ又字ノ宗トスル所ノ大概ヲ知ラシムル事ニ於テハ前ノ歌ニ勝レリト雖モ仮名ノ数ヲ合セ歌トシテ其ノ字ノ宗トスル所ノ大概ヲ知ラシムル事ニ於テハ前ノ歌ニ勝レリト雖モ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

めくゝやそ小学のおもむきをそんぢ筆をとりてかゝせ
へともちりぬるとをなくしもあるゆゑよき様ともみそ
知慎 かくおもふのみなるに冥土へ行てもかゝるわざはせむとおもふ
神道のおしへによるあるまじとおもふ。いみ。勿論。とかく
古風にて自満せしの世よ物なれぬ今は
緞ふところ四十七音既備へ字海の法あるひ
宮廷の公式のたぐひ世俗の通用聊のさはりなき
但 知慎が 元労勝陋とすて人の信用せざる事をいん
とも生るゆゑ秦の呂政が如くあるべき程邈

隷書を作りて敵一巻あり後なりとて孔甲の雲物の獄
井より出るをよき文字古今異体天下萬國皆
模範とあり今世用ゆる所のかんなまたは隷法の余
業なり 知慎 いりてう程邈のきよ(ヒダリ)儒(ヌキ)なれともはやの
たゝ石ころ 知慎 幼稚より営林よ
かゝるあきいのる事切なり 市家となりの時爰よ称像を潜て
いたく禍福をも身自取秋風一枝
昊の爰風をそくあり(ル)今事中秋の爰よ 神会おはしまし
ゝ我茅齋よりとゝせおいまし 右の御筆をもち

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

河る事御の周典開ら千文作りけんよ粗かなへり
給ひの智力こそよと偏りぬるうへ〳〵も和幸よ不祥あるまで
して賦比のさそふ孫備りぬ又強ち戒のみもなりや
きていろは歌は國典風俗の宝書とあれる事
千載なれいそまもを移し易也よ凡庸の人のれ
とひなるべき事ふとよくく言ふまでよ上ばえ文集
書を熟こそんも神書も世なのひろまりまし
とて偏ら淳宝一通をこそ参議菅公京より長岡
望しまる前年給ひの詔を故ぬ活地つる

仙洞よ進ちまし時宇様寺勝
徽感不斜と奉ちれしうけてよ菅家の法
事なるまは神感の今の著しまる紙感嘆し
なるひろ乃乙奏
説を勝こそんまは給ひ面目をまる事りて
神会ととるよ萬世よ偕うなんまいそうけ悦なる
つまや

東武野人細井知慎百拝

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

君臣歌注解　此注解ハ和漢ノ中ノ一ノコトヲ挙ルモノニ

きみまろら　君臣　五倫ノ内ノ君臣ノ義ヲ主ニ

君臣合躰ノ泰平ノ本源ヲ

ヨロコビ（ハ行）モテナシヲ（ヲ）ヲ首ニ

れやこ　親子　親ヲハジメテ古今ノ序ニ君モ臣モ

又世ノ中ニ云父ノ恩母ノ

おもたに　夫婦ノ男女ノ事ヲ我父母ノ間ニ

いそセに　姉妹　姉妹ハ夫婦ノ縁ヲ移シ傳ヘテ

世継也　兄弟ノ道ヲ別ヲナシテ家ヲ夫婦ト離レテ

あまつ國ノ大なるハ云ニおよばず　天ノ中ニ住ル下ノ愚痴ノ者ニ

泰平ノ風化ノ義ヲ云ヘルナリ

えとも也　兄弟　群

えのと　略ニいろと共ニ君ノ有リ甲乙ノ差ノ

よりも是也　兄弟ノ同氣連枝ノ如ナル父母遺躰

をなり　友ハ天性ノ

我親ヲ慢ル名ヲ惣ヲ生シ

ル者ヲ貪リテ妻子ヲ和ラテ或ハ離ニ至ル

ル孝ヲ云ヘル也　又世ノ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

五倫は内朋友を通ていふ
そうは友ぶことを先として信ずることを別
朋友の道也孔子のことをも
の内皆兄弟とも朋友の道を信とよふ兄弟の道交友と
いふ誠をつて交はるゆゑ二物をうしぬる也
（以上冒頭の
神言也）

おほりたうして　鑿井種田是より初穂迄種て御ふる
玄葉なり兄弟朋友難有して上君親よりふる
ふるへくまた出勤撃壌の歌よりとつけて君
業ふ高年のものふ是をあして主君のよう
工商のやうなれどもこれとてる事ならん事と也
す意しけり　耒耨　耕作の道具
園ふ本業ふ一粒萬倍をおんたかと訓ふ
ちくはなしよりて百姓をいふ
粒を米業の民をいふ
あめつちきかゆ　天地業ふ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44
ガラス使用

地祇のいろなり是仁道を
なせけ工業施して善
よをわひろ 世俗人仁義の大徳なりてもふ幸
まて学よおとろくりのく又賢徒
支藏そもそもても人よもろれぬる多きことの時な
ろて君子なくまれ
ひりて廃られみつふあ
ふ多欲のふ業をなる時 世を泥人をも招こそ
過を悔改る事なく自暴自棄して我と

多をほろろてるる影おなり 滅ないま
へうとまるせうといふ略語なる 右に賦姓や
ふねのろなは 舟之檣縄 計一句に結語ありて
比の船よも多くて渾海を海る檣楫帆縄
綱よるくはいうせん世をこ度るよこ綱仁義よ
ようもん又いうもん神書儒経仏説よも多を
よてたるもの本業長多くして切なる人の天幸
ありて世を楽しく海る吹風よ帆と
揚なるる海よ楫すてそ一不幸よ一て

世ゐをてらすもの道法游至悉風ふなの
ことしきうま檜縄の俊拔得てんといひてう淺き
深さいらふ岸まで到るこ三綱五常の道よ
をしえんいひてう一なひうちをを
求め舊染の汚をすゝてホ然の善をうる事を
ほんやけ句ふ出うもの
古稽もして上古の語家勢かよるよ似うう
志うなうふ文字もて法ふまりてさるよの
外ももまる地ありまで遠浅ものこ大なるやの
まちなく縁り出ゐたるも神助なるへーと
いふことしうう

○之一ノ辭。國字一し両文共用。知慎按スルニ
之作レ一。則似二可疑者一。曾テ撿スルニ篇海ヲ有ニ
一字。今附二于巻末一以備二考證一

篇海去声一息利部十五劣字一
上行讀若句引而下讀行ス知退又古本切
二切。共与二國字一音全不レ同一奇談ニアラ乎
古篆彙選ニ軫韻
古本切上下通也

享保五年庚子歳八月十八日

廣澤野漁知慎記

一或曰近湧前墓照公江を尋しかい胡廷あはいろはとまるかな
ちの事ふのとまあしと得られるとある

一片假名イト問闘古篆彙選ノ首ニアリへの字世應説多シ
道風ノ真跡ニ乙ト有要唐墨書ニソヽナト皆四ツ乙ト書ケリ

仲哀波探玄秘

神功皇后以前ハ文書傳ラス庶事口ヲ以テ傳フ

文字渡ル事ハ 欽明天皇紀ヨリ見ユル

丙午命ノ境部連石積等ニ更ニ肇ヲ俾テ造ラシム新字一萬余字

漢字ノ事集ノ字ノ如キハ漢字ノ

義ト音トヲ以テ和訓ヲ施シテ書ク初メヨリ後ヲ

天平勝寶年中大和訓ヲ以テ備々片假名ヲ平字ヲ

作ル大和假名ヲ作ル

阿伊宇江乎加

喜久

笛已

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

茶シ　須世曽多チ川ヌ止
奈仁奴子乃ム有ヲ比不ヘ保
ホ
ミ牟女毛也井ム勇エ與
良利流礼呂台和伊宇江於

シ之字ヤツシ　ツ川字
全疎用　全疎用　千子井ミ和訓全疎用
八或八字　ヘ及字ヲ取或人ノ字

いろは
色雖匂散我世ハ
なほ　あさき　ゆめみし　ゑひもせす
今越浅夢不酔
誰常有為奥山
けふ　こえて
こ
ん

右天理抄ニ云弘法大師いろはの長歌ヲ始ルト云リ
篇中ニ於ル呂波字七字ヲ布ル前ニ詞也濩命ハ空海
作ルいろはにほへとちりぬるを　濩命ハ空海
作ルこと疑フ又説ヨ比叡山安然和尚の作ルと云ヒ乃
説ニ用ルハ一いろはより以前の假名ニハ日本紀
万葉集乃歌のとく漢字の義ヲ訓ヲカリ
当ル也ヘ假名ニ定ル今假名ニいろはのこと
假名といふあり平假名ハ平易の義ニ
以　呂　波　仁　保　へ　と　止
い　ろ　は　に　ほ　へ　と

流 流 累 類 越 越
与 與 太 太 曽 曽 川 川 楚 楚 津 津
同 同 省 省 連 連 禮 禮 作 作 禰 禰
那 那 南 南 奈 奈 可 可 所 所 王 王
手 手 堂 堂 遠 遠 和 和 加 加 怒 怒
努 努 留 留 梨 梨 李 李 知 知 利 利
里 里 丹 丹 耳 耳 保 保 遍 遍 止 止
登 登 尓 尓 幣 幣 千 千 盤 盤 路 路
八 八 者 者 宅 宅 家 家 流 流 累 累
類 類 越 越 手 手 与 與 太 太 省 省
連 連 曽 曽 楚 楚 所 所 多 多 与 與
太 太 礼 禮 作 作 禰 禰 那 那 川 川
字 字 同 同 字 字 字 字 字 字 字 字

正恭私曰
ヘノ字実ニ
四ノ字ヲ略ス
ト有益盛
ヲ参考
ト書
ナリト雖
左カ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

ら 良 む 武 う 宇 み 為 の 乃 と 杜 於 く 久
ゐ 良 ら 羅 ん 无 学 無 舞 字
子 宇 井 井 乃 乃日本紀之古書校宣訓 濃 井
や 也 ま 末 け 計 ふ 不 こ 已 江 て 天
引 弖 哉 万 満 斗 計 化 造 希
布 婦 丁 已 古
盈 衣 衣 字 ナリ

え ノ字ト スルハ非也 う 天 く 天一説 伝字 高 帝 亭 ○江字
或ハ衣ノ字 依ノ字ト 猶トモ 元用カタシ
あ 安 さ 左 き 幾 ゆ 由 め 女 み 美 し 之
阿 阿 左 佐 賀 幾 日 支 起
由 遊 妙 妙 兒 見 三
一 之 志 新 ○ めノ字或ハ面或ハ名或ハ
妙ノ字
慧 比 毛 世 世
寸

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

恵 清来 衛 発 記 飛 日 也 也 悲

毛 也 業 母 母 を 世 勢 寿 寿

須

一或書ニ京の一字ハ俗ニ大師ト有ルとも大師ハ弘法大師の事ニて古ク京字ハ出ザル歟

一まよひ万億まて古ク出ザル例や

一まよひ雑波津の古聖の東文のあさやかの事ハ一巻の如き也古今集乃序ニ此ふたつの哥をこの父母の風ふたつの哥ハ

ま習ふ人のはじめとをしふるなり

一訓ノ音を解ン字多シ一四十七字の内訓の字なしと云へども

○江ハ音コウ訓ハ工也エ也止也音シ和訓トマル

○ゑハ音タン訓ハ工也兄ハ見也用ル字ニ○ゐハ丹也音タン訓ハ工也兄ハ見也

音ケン訓ハ也ナリ今ニおゐて二千三百年

一人代の初神武天皇より

餘ヨ前ル後ノ中葉の古文を改め隷書ニなし

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

秦始皇時ハ日本人皇孝七八代靈孝元の時ヨ南
北ニ分レ今ヨ至テ二千年ヨ及ぁり
一ト部家の書ヨ神代の文字
トいひ況ンや人かゝまで上古神代文字ありき事
明ラ―字三代元明の時漢音ハ傳ハリ呉音ハ傳ハラ
佛書ト宗ム又和訓ヲ外音ヲ義ヲ定ム
瓊華抄ヨ日本神代より傳ヨる文字ヲ以テ
字ヲ外ヨ加ヘて多ク漢字渡リ傳ヘて後日本の文字ハ
成ト云ふ人の曰日本人ヲ文盲ヨしてふ空事ニいろは文字の如
ふり学ひ易きヨより漢文字ヲ知ル人ハ十ニ八九ヨ
人自然ヨ備ハりまて用ヲりぬと学ふ

悉曇五十字母

者天竺之文字也

上ハ梵字ヲ音ト
云下ノ片假名ヲ
韻ト云韻ハヒキ也

阿	伽	娑	多	那	波	摩	也	羅
イヤ ウワ	キヤ クワ	シヤ スワ	チヤ ツワ	ニヤ ヌワ	ヒヤ フワ	ミヤ ムワ	イヤ ウワ	リヤ ルワ
伊	祇	尸	知	尼	比	美	伊	利
イ井 ウイ	キ井 クイ	シ井 スイ	チ井 ツイ	ニ井 ヌイ	ヒ井 フイ	ミ井 ムイ	イ井 ウイ	リ井 ルイ
烏	倶	蘇	都	奴	布	牟	由	留
イユ ウウ	キユ クウ	シユ スウ	チユ ツウ	ニユ ヌウ	ヒユ フウ	ミユ ムウ	イユ ウウ	リユ ルウ
阿	祁	世	帝	泥	部	梅	延	禮
イエ ウエ	キエ クエ	シエ スエ	チエ ツエ	ニエ ヌエ	ヒエ フエ	ミエ ムエ	イエ ウエ	リエ ルエ
乎	其	曾	登	能	保	母	用	呂
イヨ ウオ	キヨ クオ	シヨ スオ	チヨ ツオ	ニヨ ヌオ	ヒヨ フオ	ミヨ ムオ	イヨ ウオ	リヨ ルヲ

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44
ガラス使用

淳古幼童手習和歌

一難波津を咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くや此花

此歌を人皇第十六代仁徳天皇未だ皇弟(ウジ)菟道稚郎子(ワカイラツコ)大鷦鷯(サザキ)御兄弟共御互に御位を譲り給ひし事を空位なりしを仁ゝ

此歌をよくてなり大鷦鷯皇子仁徳天皇と申せる此君聖天子にて御在ましたれ譲の風を揚民の苦

ふり賑恤(シンジュツ)ゆるし上下和睦せりこれ皇の御制も此時の事なり春辰の序代といふもかゝる代をいふなり

皇后此歌を奏せり春の始めをよろこぶなり

一浅香山(アサカヤマ)かげさへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは

此歌は安貞帝(アンテイ)此時の皇后葛城(カツラギ)の姫(ヒメ)橘の諸兄公(モロエノキミ)橘奈良麻呂(ナラマロ)任ぜよと請ひ給ふ

しかゝる情(ナサケ)の色見えけるこゝろ仕ふる也一家(イッケ)の事なり

をよくこゝろもち給ふ

和(ヤハラ)ぎ事なく安治(ヤスオサ)ゝ

此歌は此姫と歌の君臣合体(ガッタイ)平天下の経(ツネ)き歌なまで歌の父母としてまつる人のはじめとせし

今のいろは假名(カナ)あるはこれのごとく治勤操護命

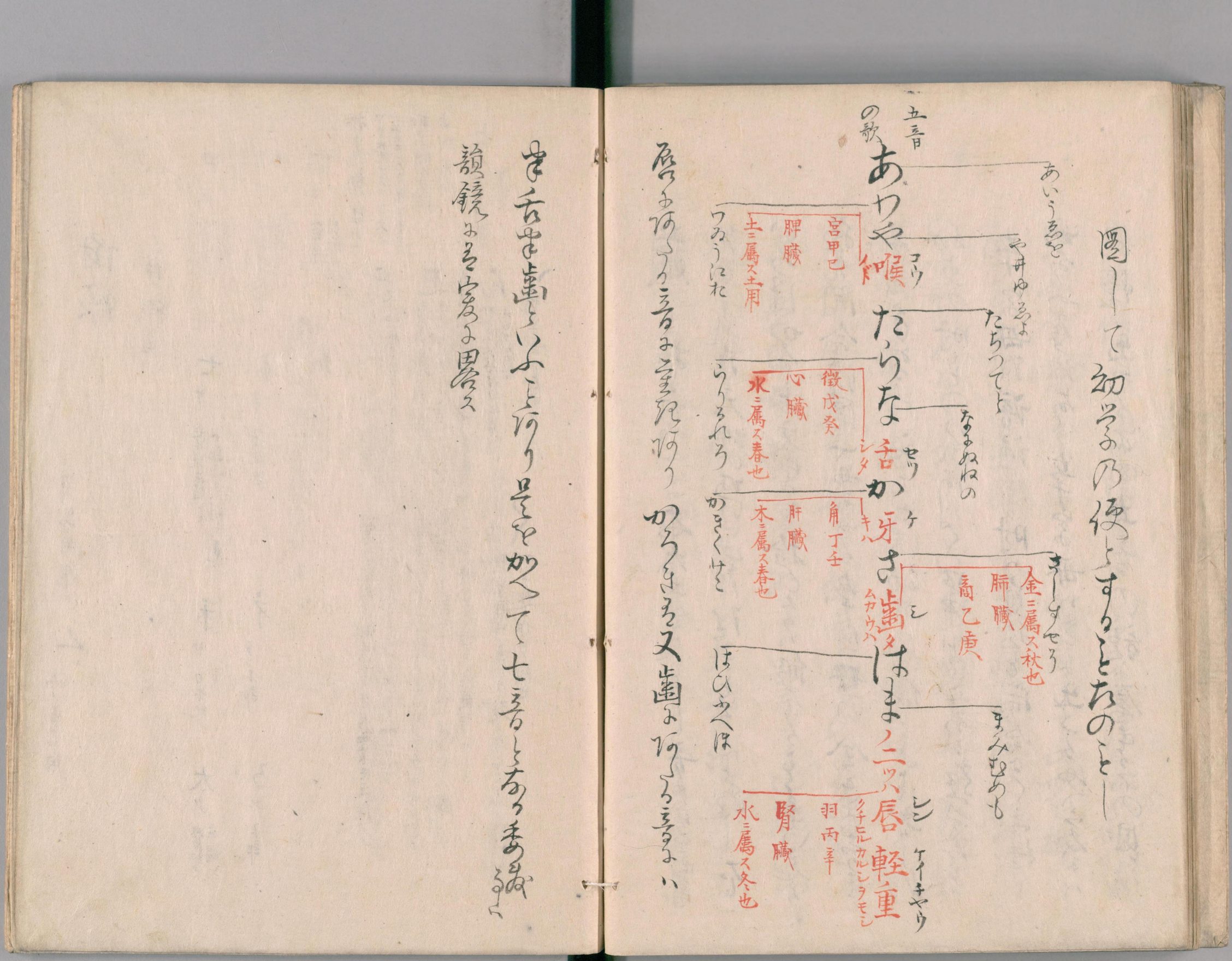
国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号 辰-44

ガラス使用

安強ら作ということ鬼角淫層式の作成
ゆへ喜常意(変ヵ)多のことうと
脇ひき死のつと出離して永く悟の地と求めよと
の長歌の心なり強く。いろは句とちりぬるわ
世誰う常なくんと長歌の句和にわくくるる東
ことかるくん。芳忠拙多幼童よりの手習の
まて辛字毋は教うるいへとも血言よ洩ることわし天地負拾弐字(ママ)
比ゆへよ天なりつてい只毋の恩と人となつてく

五臓とゝ拙なりつてい未だ五合水とし音のハ空高角
徴羽とゝ六天地のつひ仕理なることわし花
いろはかなを文字を拾ひたなハ能そうこともいえり
強元閏会清濁一巻七五十字の毋乃金きよ志うを
呂玖手多礼つねゝは幼学の後よゝおうくん
幼少の時ことのいひ加くく帰ととろる数ひたと
五十字毋我語誦ふる時ハ自然と開会よく呂律よ
かなよろ程あり辛字の毋いまよ出てゆく義なハ
額接よ出てる加の訳ハ属する加の因(ママ)

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44
ガラス使用



開て初学の為よくするとのこと

唇舌歯ふたつの事を加へて七音とある事

国立国会図書館　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用

附録

片假名

古キ節用集ニ𠂉ユノ字ニ用

甲ホ 菅家ノ点圖

七サ 菅家点圖トモ ト部ニツタヘシ 経点見

禾ワ 日本紀ノ点

ムツ ト部ニツタヘシ 経点ニ出

丁マ 菅家 ト部トモ

木子ネ 菅家点

太タ 菅家ノ点圖

爪ス 菅家

ネ子ト部

ラメト部

按字槪雜抄名ハトアリ是メスナリスノカナニ爪ヲ用ヒタリ

柳文諸家注

古訓点本

ラヨミ与ノ字ノ異形

一 梵字ノ二トルナリ梵書ニコレヲ空点トモ又悉曇ノ点トモイヘリ其法所謂空点ノ音ヲナスニト此点ヲ加ルナリ

丞 空点ノ音トハ俗ニハタルトイウ音ノ事ナリタトヘバ丞ノ字ハ阿トイフ字也ソレヲアントヨム時ハ丞ノ点ヲ加ヘテ丞ニ作リ長呼ナリタトヘバ延ノ字ハ𠀋ノ字ヲ長呼ナリトモシウトヨブ時ハ多ニ作ヲ云長呼ナリ

ん 梵字空点ヲトルギ片カナニ見エ

梵字長呼点ナリ 丞ノ字アントヨブ時ハ丞ノ字ヲ加ヘテ丞ニ作ルノ類也

ヽ 梵字長呼点ナリ

豊按凌雲集

従五位下行内舎人正倫伝仲雄王

謁海上人詩云

字母引三乘 真言演四句

按海上人空海和尚 号多好作梵字

いへり

類聚国史 文粋 経国集

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

辰
44
4

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

辰
特
合
30
44

国立国会図書館　タイトル『三十輻』 請求記号 辰-44

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『三十輻』　請求記号　辰-44

ガラス使用